

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2008年1月号 第16号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email omiya@church.jp

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

-1 コリント 12 章 27 節-

北海道の冬を経験している者には関東の冬がもの足りなく感じるときもありましたが、先日雪が降り、子どもも私も大喜びでした。肌をしみるような寒さからなかなか解放されないこの頃ですが、皆さんが主の平安の中でお過ごしのことと信じております。

大宮教会は、27日の主日礼拝後会員総会を開きました。総会の中で、昨年は3名の仲間がみ許へ召され、新しく10名の仲間が大宮教会の群れに加わって来たことが振り返られました。昨年は、別れる悲しみと出会う喜びが多かった一年でした。そんな一年を送り、そして新しい年の歩みを始めていますが、今年は、神さまが大宮教会に対してどのような計画をなさっておられるのか、時々、わくわくする心で歩み出しています。この年も悲しみと嬉しさが交差し、苦しみもがくこともあると思います。しかし確かなことは、神さまは絶対に手ぶらのまま与えられているときを終えるようにはさせない方、小さくても、大きくても、必ず実りをもたらせてくださる方であることを信じますし、私たちがあらゆる困難の中を通るとしても、満たされた者として、豊かにされた者として、また来年、新しいスタートラインに立たされていくのだということを確信ができた場だったと思います。そして、「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」(1コリント 12:27)。この箇所が本年大宮教会のテーマ聖句として選ばれました。それぞれ主に仕えて生きる姿は違うけれど、みんなは主の体なる教会の一員としてつながっている、ブドウの木につながっている枝のようにつながっている仲間であることの確信も新たに持つことができました。皆さんもこのシオン通信を通して大宮教会とつながっておりますから、この大宮教会の基本指針のもとで神さまの祝福にともに与りましょう。今年も、シオン通信を通して皆さんと大宮教会との間に豊かな交わりがありますように。そして何より、教会にいらっしやるのが困難の中におられる皆さんが、シオン通信を通して神さまの豊かな恵みと祝福に与るときでありますように祈っております。どうぞ、今年もよろしくお祈りします。

聖書のみことば 1月27日(主日)顕現節第4主日礼拝
マタイによる福音書 4:18~25

18 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20 二人はすぐに網を捨てて従った。21 そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。22 この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。23 イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。24 そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。25 こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

説教

すぐ網を捨てて

職人がその道具を手放すときはその仕事から身を引くということを意味します。または、道具を手放さなくても、使うべきところで正しく使わないときもその職業を放棄したことになります。このように、職人にとっての道具は、仕事そのものを現すことになり、職人にとってとても大切なものです。

聖書にも職人のように道具を用いて仕事をしていた人たちが、その道具を手放す場面がいくつか描かれています。

救い主の生まれを告げる星に導かれて、イエスさまを拝みに来た東方の博士たちがその人たちでした。彼らは星占いをして、それによって天文学や自然科学、またはそ

他の学問を研究していた人たちです。彼らが占いをする際に用いられていたのが、黄金や乳香や没薬だそうです。これらは、彼らにとって、彼らのすべての学問やそれに連なる仕事をするための基本になるものですから、とても大切なものです。しかし、ベツレヘムの馬小屋に生まれたイエスさまに出会う博士たちは、イエスさまにこれらすべてをささげました。自分たちにとってとても大事な道具をイエスさまの前に手放したのです。つまり、彼らは救い主イエスさまの前で、今までの生き方を変えるという決心を現せたのです。

今日も、この博士たちと同じように、イエスさまの前で自分たちの道具を手放す

人たちがいます。ガリラヤ湖で魚をする仕事としていた漁師たちです。この日もこの漁師たちは漁に出る準備のために、網の手入れをしていました。そんなところへイエスさまが訪れ、「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしよう」と声をかけられました。二人はすぐ網を捨てて従ったと聖書は語ります。二人は漁師でした。漁師にとって網は職人の道具そのものです。漁師が網を捨てるということは、もう漁師として生きることを辞めますという意思表示です。ペトロとアンデレ、二人の兄弟はこうしてイエスさまに従っていきました。

また他にもう二人がいました。ゼバダイの子ヤコブとヨハネです。彼らも漁師でした。父ゼバダイと一緒に次に漁に行くための網の手入れをしていました。しかし、そんな彼らもイエスさまに声をかけられると、父と舟を置いてすぐイエスに従ったと、聖書はそう語っています。お父さんが一緒に舟にいたということは、漁師と言う仕事はこのゼバダイ家代々に継がれてきた仕事だったと考えられます。ですから、二人はその代を継ぐ立場でもあるのに、父をおいて、舟をおいて、すぐに、イエスの後に従って行くのです。

当時、漁師とは社会から低い立場にいる人たちの仕事でした。羊飼いたちもそうですが、漁師も同じように、悪臭を放つ仕事もそれに従事する人も人々から避けられました。ですから、漁師たちも羊飼いたち

と同じように社会の偏見的な視線を意識しながら働いていたに違いありません。

イエスさまに呼ばれている弟子たちは、この四人だけではなく他の人たちを見ても、人々から嫌われる徴税人がいたりします。人々にあまり喜ばれない人たちがイエスさまに召され、そして直ちに従っているのです。つまり、このことが意味することは、イエスの弟子になることは、その人が持っている能力や知識によるものではないということがわかります。それはただ一つ、神の恵みによってのみ、人は選ばれ、弟子とされ、イエスさまの後に従っていくのだと。もう少しこの世的に優れた人でもよかったのに、もう少し理解力のある人たちでもよかったのに、主は弱さで造られているかのような人たちばかりを弟子としておられる。人間側にあるものは、それがいいものであれ悪いものであれ、イエスさまとふさわしいと思えるようなもの何一つ人間側から要求されない、まったく反映されていないのです。これが神さまの一方的な恵み、そして一方的な招きの原点であるのでしょうか。きっとマタイはこのことを語ろうとしているのではないかと思うのです。ですから、今日わたしたちは、ここで語られているイエスさまの招きとそれに応答して立ち上がる弟子たちの姿から、自分たちの信仰の原点に戻ってみたいと思います。つまり、イエスさまの招きを受けて導かれて、信仰生活を営むことがゆるされた中で今まで歩んできた私たちは、今、何が自分の信仰の基となっているのか、それを考えてみたいのです。

宗教改革の際ルターが中世の教会の問題点を指摘して打ち出した一つは『恵みのみ』でした。つまり、神の恵みによってのみ生きるということです。中世の教会は物質主義教会でした。信仰生活は常にお金と結び付けられていましたし、政治と宗教が合体して権力を振舞うようになっていました。それでも教会は教会として呼ばれましたし、聖職者も職務に仕えていました。けれど、教会は建物があってその建物の教会が教会と呼ばれれば教会になるのではなく、礼拝の時間を守って礼拝をしていれば教会の義務が果たされるのでもないので。教会の群れが神の恵みも知らず、人間側の力で教会を営み、信仰生活も自分たちのもっている富みや権力で営むとすれば、それは神の教会と言えないのでしょう。しかし、今でも、中世と同じように行うことを喜びとし、そこにこそ居場所を確保し、自分だけのいやすい場所としているならば、それはキリストの体なる教会になるでしょうか。それを教会と呼び、礼拝が行われているならば、人は集ってくるでしょう。けれど、キリストに教会を譲らない人の力のもとで、人たちはどうやって神の恵みに与ることができるでしょうか。

教会は人間の集るところでありますし、人が奉げた献金を持って運営されますし、人の奉仕でもって礼拝も成り立ちます。ですが、その頭はどんなことがあってもキリストでなければならぬのです。つまり、キリストの体なる教会であり、そうであるときはじめて神の恵みの豊かさに人は気づくようになるのです。つまり、神の恵み

豊かさに与ることなしに、人は感謝することができないということなのです。

神の恵みによってのみ生きる。この言葉がもしかしたら理想的な言葉、神の恵みによってのみ生きることは理想的なこととして捉えてしまっているのではないかと、私は今の教会に対して、この教会に集う私自身と皆さんに問いたくなりますが、というのは、ここにいる皆さんと私は、本当に切実に明日食べるものの心配をしなくても生きられる経済状況の中にいると思います。日本という経済帝国の豊かさの中で、生活レベルは欧米や他の国に負けないほどになりました。しかし、豊かになっていけば行くほど神の恵みの豊かさは小さくなっていくことに皆さんは気づかないでしょうか。人の心がますます貧しくなっているのです。教会の中でこの世の尺度をもって物事を判断していくことが強くなり、聖書が語る豊かさは二の次のことになってきている。ですから、生活が豊かになっていくことを警戒するということがおかしいことですが、しかし、人の生活の豊かさと神の恵みの豊かさは反比例すると、私はそう思います。つまり、いつの間にか教会から感謝の声が少なくなってきた、いつの間にか自分の中から感謝の声がなくなってきたことに気づくからです。

つまり、わたしたちは、あの四人の漁師とは違います。物事に関しての理解力はあの四人よりはあるでしょう。漁師という偏見的な職業柄くる差別も受けていないと思います。経済的にもあのガリラヤの田舎

のような貧乏な暮らしではありません。だからこそ大切なものがたくさんありすぎて、手放さなければならぬものが一つや二つと数えられる限度を超えて、もはやとっぴりと経済の豊かさにつかっていると。そんなわたしたちは、今何が信仰の基になっているのでしょうか。

弟子たちは愚かで、イエスさまが十字架に付けられて死なれる際にも、復活なさった際にも、自分たちが手放した網を再び取り戻して、もとの仕事に戻ろうとさえしていた人たちです。けれど、彼らはイエスさまの弟子です。それは、ただただ神の恵みにだけが彼らの歩みを導き、弱い故に現場から逃げ去ったり、イエスのことを知らないか否定したり、疑ったりしていましたが、しかし、神の恵みが彼らを主の弟子として立たせたと。弱いからこそ、愚かだからこそ、何も、何かをひっくり返す力など持っていないからこそ、つまり、神の恵みなしにはどうふうにも認められない人たちだからこそ、彼らは神の恵みに包まれていたということ。イエスさまに招かれ、弟子としての召命を最後まで全うすることができた、それはたった一つ、神の恵みによるものだったのです。

この弟子たちと私たちは違います。いろいろの意味で満たされていますし、能力もあります。同じように、神の前に招かれ、神の言葉を聞き、イエスさまの体と血に与ることもゆるされています。しかし、このことは、私たちの中にある何かによってこうなったのではなく、つまり、仕方なく礼

拝に来るしかなかったとしても、または仕方なく神の言葉を聞くしかなかったとしても、それは、自分側にある理由によるものではなく、ただ神の恵みによるものでした。四人の弟子やまたは四人の弟子のような近所の貧しい人や、または偏見的な目で見られて蔑まれるようにされている誰かのような自分ではないから、この私は少し増しいとそう考えておられる方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、それは自己満足でしかないのです。神の招きに人間側の条件や理由は何一つ反映されないのです。一方的な神の恵みだけが私を私として招き、主の前に立つようにゆるしてくださいだったので。

もちろん、教会を選ぶのは自分です。洗礼を受けようと決心するのも自分です。奉仕をする、しないの最終的な決断は自分自身がぐだしますし、教会の奉仕だからといって自分の意志を立ててはならないということはありません。教会だからといってロボットみたいに動くことが従うことではないのです。そうする必要は全くないのです。弟子たちだって網を捨てるのは、自分たちの意志によるものでした。けれど、その決断が、強要されて、みんながそうしているから仕方なく決めたという決断ではありませんでした。神の恵みの豊かさの中に私は導かれたのだ、その神の恵みに感謝する者として何か応えていきたいという、自由意志の中で下した決断なのです。これをキリスト者の自由と言うのですが、たとえいのちを危うくされるとしても私はみ胸を生きると決心されたのがイエス

さまであり、その後を従うように召されたのがその弟子であり、そして私たち一人一人なのです。この方の自由の中で生きるように。つまり、神の恵み豊かさを知らされた者として歩みなさいと、神の恵み豊かさを知らされたならば、その者はこの世の豊かさをもって神の前に立つことの愚かさを知らされるはずであるということが、今日イエスさまに従う弟子たちの姿にあります。

つまり、神の恵みに生きる人の自由意志というのは、たとえば、今息をして生きていることを、「生きている」とは言わないのです。「生かされている」というのです。「生きている」とは、自分の力によって生きていることですが、「生かされている」とは、そこには自分以外の力が働いていることを認めていることになります。ですから、教会の奉仕だってそうです。奉仕をやっているとは言わず、させてもらっているのです。やっているとは、自分の力で自分のことをやっていることですが、させてもらっているとは、他の誰かの仕事をさせてもらっていることになります。つまり、させてもらって光栄ですと、感謝しているのです。これは単なる日本語が能動形であるとか受動形であるとかの問題ではなく、その人の心の深いところでの感謝が言葉を通して表明されているのです。

つまり、原点を失わない歩み。私たちは、自分がクリスチャンになりたかったからなれたのではない。神の恵みが私をキリス

ト者として生きるように、救われた者として生きるように導かれたということを知るので。一方的な神の恵みが私の人生の中に、目に見えないかたちで働いていると。これこそが私たちの信仰の原点であり、今の私たちの信仰の基もこの神の恵みの働きによって堅くされていくのです。この原点を失わない時、信仰の基が神の恵みの豊かさの中にあるとき、私たちは、自分のいのちが、実は自分のものではなく与えられているものである、自分の家族や信仰の仲間も私自身がよりよく生きられるように与えられているものであったと告白できることでしょう。

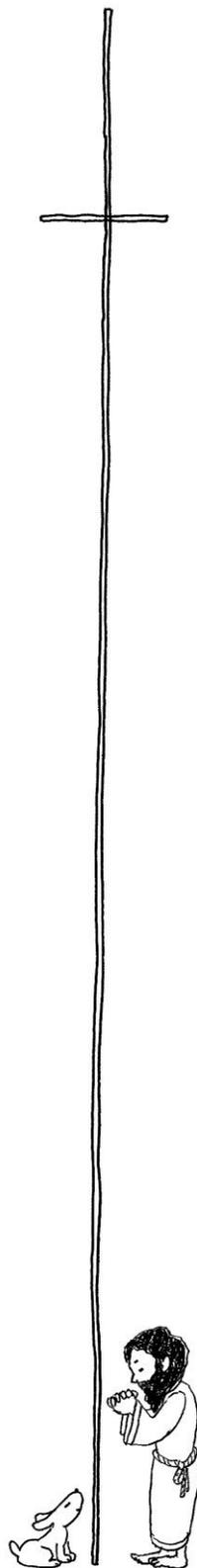
自分が生きる手段であって、それがなければ自分自身の歩みがどうなるかわからないほど大切にしているもの、それを博士たちはイエスさまの前にささげました。救い主の後に従うためには、今まで通りでは従えないからです。四人の弟子たちが生計を営んでいた網を、舟を、イエスさまの前で手放しました。漁師に網があればイエスさまの前で網をもって振り回そうとして、まっすぐに従うことができないからです。

私たちがイエスさまの後に従うために捨てるべきもの、捨てなければまっすぐに従うことが難しいもの、それは何でしょうか。何をイエスさまの前にささげて、イエスさまの道とともに歩むようにされるでしょうか。これは、今自分がどこにいるのか、どうして自分の中から感謝の声が少なくなっているのかが問われることと同じ

ことでしょう。自分の信仰の原点へ戻って、神の恵みに応えるために、自分の中で邪魔になっているものは何なのか。神の恵みによって招かれ、神の恵み豊かさの中で生きるように導かれている私たちの今の歩みを振り返ってみたいのです。皆さんと私が、生きていたのではなく生かされていたのだと、ただただ神さまの恵みに感謝できる一人ひとりでありたいです。

お祈りします。

神さま、私たちはイエスさまに従うために邪魔になるものをもっていながらも、それに気付かず歩みが続けています。けれど、私たちはイエスさまの後に従って歩みたいと節に願っています。願うこととやっていることが異なるような、矛盾な歩みをしている私たちですが、どうかあなたの恵みによって、本当の意味で豊かに生きる者でありますように、私たちを導いてください。私たちの頑なな心を砕いてください。自分を誇り、自分自身をイエスさまよりも優先させて歩もうとする私たちの思いあがった歩みをゆるし、どうか自分の弱さを誇り、それゆえに神の恵みの豊かさを知らされる者でありますように。神さまの恵みに生かされているという告白ができる者でありますように。それによって感謝の声が私たちの口から溢れ出ますように。私たち一人ひとりを豊かに導いてください。私たちにお声をかけてくださり、ご自分の後に従いなさいと招いておられる主イエス・キリストのみ名によって祈ります。



【2008年2月礼拝予定】

【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10時30分～

2月3日(日) 変容主日

聖書：出34:29～35、2ペトロ1:16-19、マタイ17:1-9

主題：起きなさい。恐れることはない。

2月6日(水) 灰の水曜日

聖書：ヨエル2:12-18、2コリント5:20-6:2、マタイ6:1-6(16-21)

主題：偽善者であるにも関わらず

2月10日(日) 四旬節第1主日

聖書：創世記2:15-17、3:1-7、ローマ3:21-31、マタイ4:1-11

主題：仲良しという誘惑

2月17日(日) 四旬節第2主日

聖書：創世記12:1-8、ローマ4:1-12、マタイ20:17-28

主題：仕える

2月24日(日) 四旬節第3主日

聖書：出17:1-7、ローマ4:17b-25、ヨハネ4:5-26(-42)

主題：渇く信仰

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】

- ・ 第一・三水曜日午前11時よりヨハネによる福音書を女性の視点から学んでいます。
- ・ 第二・四水曜日午後7時より夕礼拝を行い、旧約聖書から説教をききます。
- ・ 毎週金曜日午後3時より女性の視点による聖書の学びを行なっています。特に英語学校生徒を中心に、英語学校授業スケジュールに合わせて行なっております。
- ・ その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。
(2008年は毎週月曜日と土曜日にキリスト教入門講座が開かれます。)

